

「一流になりなさい。それには、一流だと思い込むことだ」という本からです

日本の時代になる

多くの経営者と世界中を視察で巡ると、一つの確信がもてます。“世界は日本化する”という確信です。世界はベクトルとして、“豊かさ”へと向かって猛スピードで進んでいます。

豊かさは、人間の眼を“質”へと向かわせます。量的経済から質的経済へと毎日毎日多くの人たちが回れ右をしている、それが現在です。発展途上国も豊かになり、より安く量を求めていた人たちのなかでも、価格より質へ、量よりよいものをと、生活観が変換する比率が高まっていくという意味です。「日本の時代になる」船井先生は言い続けてきました。日本の思想や日本の価値観が世界の主流にくると語っています。

その実感を、強くします。もっとも高い品質をあらゆる分野で実現しているのは日本です。生活の平均的質感の高さ、あるいは質に対してもっとも厳しい目をもっているのが日本人なのです。「アメリカのウォルマートや、フランスのカルフールが日本市場に入ってきた怖がらなくていい。必ずうまくいかないで行き詰まる」

マスコミが流通業の黒船襲来を大騒ぎしているときに、先生は穏やかに語っていました。それは、商品構成、品質基準の高さ、サービス対応力、すべてにおいて日本人は厳しい目をもっているからです。量と価格で市場を圧倒することはできないと断言していました。世界の生活のベクトルが、豊かさや質へと向かうなかで、世界の品質基準は日本を指針とするようになりました。世界中の一流ブランドが東京に店舗を出すのも、日本の厳しい品質への感覚を自社の品質基準として利用できるからです。世界観とともに、人生観も、世界中で日本化が進むでしょう。

ロハス等とカタカナで言われた自然環境志向型生き方。それは何も、ロハス！などと英語、カタカナで呼ぶ必要すらない日本的人生観です。船井先生は、天地自然の理に則った生き方と言うでしょう。本来、日本人が大切にしてきた自然のサイクルに則って生き、自然に馴染み、自然を生活に取り入れ、自然に学んで生きるということです。損得ではなく善意を基準に生きなさいと船井先生は語り続けました。

自分より全体を大切に、個よりも地域、地球のことを考えて行動しようと語ります。ゼロサムゲーム、利潤追求型生き方が正しいものではないと言い続けてきました。競争ではなく、共生できる社会、強者が弱者を思いやり、よりマクロの善を一番の基軸に考えようと語り続けてきました。世界が物的豊かさ、物的モア＆モアの追及に遭遇している最中、先生ただ一人でした。日本的人生観が、世界中で普通に語られる時代に入ったと思います。それは、アメリカにおいてもまったく同じです。ハイブリッドカーのプリウスに乗ることが、フェラーリに乗ることと同じくらい、否、それ以上にカッコがよいとアメリカのスターたちは思います。自らの富を謳歌するよりも、その富を弱者のために、環境のために利用してほしいと考える実業家が、普通になりました。船井幸雄が予見していた社会が目の前に現れつつあることに、時に感動すら覚えるのです。

近未来を予見することは、時に誤解を招くこともあります。船井先生自身、寂しさを感じることもあったでしょう。先生の分身であるはずの社員ですら、悲しいことに、その予見に対して冷笑する者がいたのです。そんな社員をも批判せず否定しない船井先生に、日本の美を感じたのです。そしていま、確信をもって日本の時代になる！と多くの識者たちも言いはじめました。歴史観、そして文明観という視点に、コンサルタント的視点をミックスして船井先生は未来を見ていたのです。リーダーは、未来創造業であれと、経営者の人たちに伝え続けていますが、確固たる未来観が、多くの人の勇気の源になるのだと思います。

リーダーは、何業になれと、船井先生は言っていますか？

(

)